

《シンポジウム》

2014年度シンポジウム司会報告

司会 周藤多紀

2014年度のシンポジウムは、2013年度に引き続き「中世の自由学芸」をテーマとした。2013年度のシンポジウムでは、古代ギリシアから12世紀に至るまで、自由学芸がどのような形で実践され理論化されていったのかが考察された。2014年度のシンポジウムでは、翻訳や注解によってアリストテレス^{コルプス}著作の受容が進み、大学という制度が確立した13世紀を中心に自由学芸の理念を考察することが意図された。13世紀のパリ大学学芸学部教師たち、フランシスコ会のボナヴェントゥラとドミニコ会のトマス・アクィナスのテキストを、最近の写本研究や歴史研究の成果をとり入れながら紹介していただくことによって、新鮮かつ多様な視点を提供することをめざした。シンポジウム本体で焦点が当てられたのは13世紀の思想家であり、諸学のなかでの自由学芸全体の位置づけであった。しかし、大会当日には古代末期の音楽論や中世・ルネサンスの数学論についての個別発表があり、さらにシンポジウム連動報告として大貫義久氏によりルネサンスにおける学問論、連動報告補論として関沢和泉氏により中世の音楽論に関する発表があった。シンポジウム本体だけではなく、これらの個別発表や連動報告に対する討議を通して、古代から現代に至るまでの自由学芸の理念の変遷と自由学芸（教養）教育をめぐる問題のある程度明るみに出すことに成功したのではないかと思う。以下では、シンポジウム本体でなされた各報告の主旨を紹介する。

まず、関沢和泉氏がパリ大学学芸学部教師たちの自由学芸観を紹介した。関沢氏は、関沢氏が「Accessus系テキスト」と呼ぶ一群のテキストのなかで、自由学芸の区分や位置づけがどのようになされているかを考察された。これらのテキストでの学問分類には、カシオドルス→サン＝ヴィクト

ルのフーゴの伝統とファーラービー→グンディッッサリヌスの伝統との統合が見られる。実質的に学問の全分野と同義になった「哲学」のうち、機械学 (mechanica) 以外のすべての学問が「自由学芸」にあたる。人間は身体を有するがゆえに、知性的存在者としての創造者から離れるという不完全性を持つ。加えて、原罪によって魂と身体に欠陥を持つことになった。自由学芸は、身体性に由来する人間の不完全性と原罪による魂の欠陥を取り除くことで人間を完成させる。自由学芸がその大部分をなす「哲学」を修める生を現世での人間の最高の生と見なす態度が、力点の相違はあれ、13世紀を通して学芸学部教師の著作のなかに認められる。

続いて片山寛氏が、トマスの『ボエティウス「三位一体論」注解』を中心に、アリストテレス注解の記述も踏まえながら、トマスの自由学芸観の特徴を示された。トマスは、サン＝ヴィクトルのフーゴなどに見られるような、自由学芸を神的な知恵の獲得を目指す「哲学」への準備学科と位置づける流れを汲み、自由学芸を哲学を学ぶために必要な基礎を身につけるための学びとして位置づけ、その学びの順序(論理学→数学)を提示している。自由学芸 (artes liberales) は学知 (scientia) ではなく、学知のための手段であり、技術 (ars) である。そして、医療や錬金術のように物的なものに従属する技術は「自由」学芸ではない。数学に関しては、計算・計量の技術としての数学と、数や形についての理論的探究を行う学知としての数学とは別物であるとも解釈されるが、片山氏は数学という一つの学問が技術でも学知でもありうるとの解釈を提示された。質料からの抽象度が最も高い神学が最高の学であるとするトマスの考え方からすれば、自由学芸は神学の学びを目的とし、神学に向かって開かれた技術ということになる。

最後に、松村良祐氏は、ボナヴェントゥラが『諸学芸の神学への還元』で自由学芸を神学と一元的なものとして提示していることを示された。ボナヴェントゥラの学問区分は、サン＝ヴィクトルのフーゴの『ディダスカリコン』の影響を強く受けているが、自由学芸の位置づけにおいてはフーゴと大きく異なっている。ボナヴェントゥラは、神の知に至るための準備段階^{ステップ}として自由学芸を位置づけることはしない。『諸学芸の神学への還元』では、範典型的世界観に基づいて、様々な人間の知の営みが神から流出する光として説明される。その光には四種類あるとされ、自由学芸の諸科目は上から二番目の「哲学的認識の光」のうちに置かれている。光を通して光源へとさかのぼることが可能であるように、自由学芸という人間の

知の営みの光は、聖書の教えという上位の光の力をかりて神に至ることを可能にするものとしてとらえられているのである。

三氏の提題を通して、12世紀から13世紀にかけて生じた自由学芸の理念の変化と13世紀の自由学芸の理念の多様性が明らかになったと思う。13世紀の自由学芸の理念は、学問分類においては12世紀のサン＝ヴィクトルのフーゴーやゲンディサリヌスの伝統を引き継ぎつつも、自由学芸の位置づけにおいてはそうした伝統を超えている。こうした変化の背景には、大学制度の確立とそれを巡る闘争（たとえば学芸学部－神学部－托鉢修道会の間）とアリストテレス著作の本格的受容があると考えられる。学芸学部や神学部といった学部間の区別をもつ大学という制度は、各学問の対象領域や目的、学問間の秩序を明確にさせ、自由学芸－哲学－神学の関係について何らかの見解を示すことを促すものであった。アリストテレス^{コルプス}著作の本格的受容は、各学問が学知（*ἐπιστήμη* /scientia）たり得るかという問いを投げかけ、各学問の対象・目的・方法に関する議論を先鋭化した。

関沢氏は、13世紀の自由学芸を巡る議論と現代の教養教育を巡る議論が類似点を有していることを指摘された。自由学芸（教養）には、留保なくそれ自体の価値が認められていた（る）わけではなく、何らかの「有用性」を主張することが求められていた（る）という点である。中世の自由学芸七科は、言葉・論理にかかわる三学と、数にかかわる四科からなる。昨今の教養教育で注目されているのも、リテラシー教育、クリティカルシンキング、外国語の習得や統計学など、言葉・論理にかかわる学びと数にかかわる学びである。2年間の「中世の自由学芸」についてのシンポジウムでの議論は、現代の教養教育の意義と内容について考える手がかりも与えてくれるものだったと思う。

本シンポジウムの企画・打ち合わせには、科研費 22720017 及び 50571733 の助成を受けた。記して感謝を表したい。
